とがわかる。収入は増加したが同時に住宅費や教育費への支出は大きく、物価は世界で最高のレベルであるため、相対的窮乏感はむしろ高まっているとさえ言えよう。

しかしながら人々はほんとうにもう一人の子供を育てる実質的費用がないから生まないのではない。むしろ一般的に言えば折角手に入れた豊かな生活のレベルを落としたくないから子供を生むことを躊躇するのである。

豊かさの中で人々が出生力を制限しようとする傾向については英国のビクトリア朝にバンクスが明確に指摘している[48]。また先にふれたモンベルト＝ブレンターノが19世紀末のヨーロッパの出生力低下について福祉説として論じている。このようにいつの時代にも「豊かさ」や「文化」が生き物としての人間の本源的な「自然」を蝕ばみ、衰退させているのである。

戦前の日本では「貧乏人の子沢山」が現実であった。人は貧乏のどん底にありながら何故沢山の子供を育てたのか。それは厚生白書が指摘するように経済的合理性にもとづく面も確かにあったが、それだけでは事柄の一面しか捉えていない。

人は子供がやがて役に立つからという功利的な計算をして子供を生む前に、「子供は天の授かりもの」であり、授かり育てることが「無上の喜び」であったことを忘れてはならない。

白金も黄金も玉もなにせむに
優れる宝　子にしかめやも

という万葉の歌人「山上憶良」の歌には親の子に対する純粋な慶びが込められているからである。

人が自らの命を継承する子供をもちたいという気持は極めて「自然」な願いである。このような「自然のたまもの」を「レジャー」と選択するようになったのは何時頃からであろうか。自然の一部である人間がこのような「反自然的行為」をしてはならないのではないか。

第3は価値の問題である。出生力に影響する要因には物質的条件や施設条件などがあるがこれらはあくまで基礎的な条件であって、その影響は間接的なものにすぎず直接的ではない。直接人々の行為を方向づけ決定するのは各人に内在している価値観である。人は妊娠や出産に関する価値指向を持っており、それにもとづいて行為している。しかも価値観は社会化され、共有されている。

経済的条件の改善は個人の価値観に影響を与えてその価値指向が修正され、それにもとづく行為が遂行されてはじめて新しい出生力が実現するのである。しかも実際のところ子供を生まないのは、その子供を生み育てる実質的な費用がないから生まないのではなく、例えば子供は1人しか生まないという価値指向を持っているから生まないのであって、この場合には何程経済的条件や施設が改善されてももう1人子供を生むことはないのである。かつてどんなに貧しくても子供だけは生んで育てたのと丁度逆に、豊かな生活様式にどっぷりつかり、これに執着している現代人の一部には、どんなに生活に余裕があっても子供だけは（1人しか）生まない価値指向を堅持している人があり、その割合が増加している。

第4に、そこでいま何を為すべきか。出生力の低下を阻止するためにはこのような既存の価値指向を変える努力をするのが最も有効な方法である。林教授が説くように現代は結婚や家族制度のゆらぎの時代であり、働けイデオロギーなどによって出産・育児に関する価値指向は脅威にさらされている。したがってこれに対する対抗策を構じるとともに、結婚育児に関するより積極的な価値指向を確立することなしには人口減退を阻止することは出来ないであろう。

そこでいま第1に為すべきことは、各界のオピニオ・リーダー、ことに政治家達が、人口構成のヒズミから来る危機の深刻さと、子供を三人生むことの重要さを一般市民に強く啓発することである。そして次に高まった世論の支持を背景に大胆な施策、例えば働きながら子育てが可能なように保育施設の増設や育児休暇制度の充実を実現することである。（筆者は物的条件の充実さえ実行すればそれが原因ですぐに出生力が向上するとは考えないが、政治が大胆な政策を実施することに

48）バンクス夫妻・河村貞枝訳『ビクトリア時代の女性たち』創文社　1980年　159頁